2022 年度 研究旅行奨励制度 報告書

# 卓袱料理から見る和華蘭文化

25AR067　中島咲良　25AR068　中西玲奈

1. 旅行日程

2. 導入

3. 和華蘭文化とは

4. 卓袱料理

5. 中国と長崎の交流

1）中国貿易
2）唐人屋敷
3）唐寺
4）唐人屋敷の結末
5）中国文化

6. オランダと長崎の交流

1）ヨーロッパとの歴史
2）オランダ貿易
3）出島

7. まとめ

1. 旅行日程

| | |
|---|---|
| 8 月 22 日 | 長崎新地中華街 |
| | 唐人屋敷跡 |
| | 興福寺 |
| | 崇福寺 |
| 8 月 23 日 | 長崎歴史文化博物館 |
| | 料亭御食　坂本屋 |
| | 出島 |
| 8 月 24 日 | 長崎市立図書館 |

## 2.導入

私たちが生まれ育った長崎は、異国情緒あふれる街だ。長崎県には他県にはない独自の文化が存在している。それは「和華蘭文化」というものだ。この言葉は馴染みのあるものだが、その実態はあまりよく知られていない。この文化の代表の一つとして「卓袱料理」がある。多くの国の文化の影響を受けている長崎県は鎖国時代に唯一開けていた貿易港だった。そこで取引していた中国とオランダとの交流の歴史、貿易から「和華蘭文化」の始まりを、それぞれ学んでいる文化コースを活かして調べる。そして実際に長崎で「卓袱料理」を体験することによって新しい発見をすることを目的とした。

## 3. 和華蘭文化とは

和華蘭文化とは読んで字のごとく、和である日本と、華である中国、蘭であるオランダの 3 か国が融合した文化のことだ。

この長崎特有の文化である和華蘭文化について知るために、その代表である卓袱料理を通して「華」や「蘭」の要素、その要素が融合することとなった歴史を調べた。

## 4. 卓袱料理

和華蘭文化を知るうえで重要な文化のひとつの「卓袱料理」。これは江戸時代初期に長崎で暮らしていた中国人が客人を招いて、もてなした料理を起源とし、卓袱の「卓」はテーブル、「袱」はテーブルクロスを表している。ひとつの大きな丸いテーブルに和、華、蘭（洋）の要素が盛り込まれた料理を並べ身分の分け隔てなく円卓を囲み、和気あいあいと食事を楽しむ文化である。

この研究にあたって、実際に卓袱料理を提供している料亭を訪れると、当時の卓袱料理を体験することができる。今回私たちは「坂本屋」という料亭を訪れた。ここでは食前酒として梅酒、お吸い物、鱧の湯引き、ヒラスとヒラマサの刺身、黒豆、豚の角煮、白飯、漬物、鶏肉のスープ、オレンジ、ブドウ、お汁粉が出てきた。鱧や刺身は素材の味を活かした味付けであった。一方で黒豆や豚の角煮等は味付けが濃く、甘みが強い味付けであった。お汁粉もあったことからオランダ貿易で砂糖が大量に輸入されていたことで比較的砂糖を使いやすい状況にあったのではないかと思う。江戸時代に日本で他地域では砂糖は貴重な食材であった。南蛮菓子と呼ばれるカステラや金平糖、有平糖などの甘い物はシュガーロードという街道を通り砂糖文化が広まっていった。その結果庶民階層にまで普及しその後の日本の食文化に大きな影響を与えた。

卓袱料理は「お鰭をどうぞ」という一言から始まり、この言葉には「お客様一人に魚一尾を使いましたよ」というおもてなしの意味が込められている。お鰭は鯛や椎茸、青身野菜などの山・海・野の幸が入っている。

今回食べることができなかった料理には、パイ生地を使った「パスティ」や長崎天麩羅などがある。パスティは南蛮料理から、角煮は中国料理から、長崎の新鮮な魚を使ったお刺身など、まさに和華蘭文化を再現しているといえる。

料亭坂本屋（8 月 23 日）　　鱧　　お鰭　　豚の角煮
筆者撮影　　（鯛の身の入ったお吸い物）

5. 中国と長崎の交流

まず中国関連の遺跡で訪問したのは唐人屋敷、長崎新地中華街、崇福寺、興福寺、長崎歴史文化博物館だ。

・唐人屋敷跡
ここには入口に大きな門があった。入っていくと住宅街の中に、土神堂・天后堂・観音堂・福建会館の遺跡と蔵の資料館という絵巻などが展示されている資料館があった。

・長崎新地中華街
十字の道になっておりすべてを歩くのにそんなに時間はかからなかった。新地荷蔵跡の石碑も建っていた。

・崇福寺
大きい道の坂の上にあり入口に入って左手には階段があり、その奥に崇福寺大雄宝殿がある。これは、福州地方の唐人たちの希望で、1629 年に創建された。また、媽祖門や護法堂など多くの文化財があった。旧正月に向けて準備をしている最中で活気があった。

・興福寺
興福寺は細い道を 10 分ほど進んだところにあり、少し道に迷った。中はかなり大きな広場のようになっており、興福寺本堂や興福寺鐘鼓楼もあった。ここでは移築された旧唐人屋敷門を見ることもできる。

・長崎歴史文化博物館
中国との交流～唐寺と唐人屋敷～という場所では長崎と中国の貿易、文化などについて展示されている。媽祖像や唐人屋敷の内部についての映像が見れる場所もあった。
中国貿易の管轄のために唐人屋敷が誕生し、多くの中国人がそこで暮らしていた。その中で彼らは、土神堂・天后堂・観音堂・福建会館の 4 つのお堂を建てた。これらのお堂は、唐人屋敷内に暮らす人々の心のよりどころとなった。また、崇福寺や興福寺などの唐寺も次々と建てられた。また、新地では中国船からの積荷を納めていた。1859 年に日本が開国したのち唐人屋敷からどんどん人が出ていき、1868 年には解体された。

1）中国貿易

1562 年、長崎に最初の唐船が来航した。ポルトガル貿易とともに中国貿易も盛んになっていった。1635 年に唐船の入港は長崎に限定され、1639 年には外国貿易は中国とオランダの二か国のみとなった。唐船が渡来した期間は 200 年以上にもわたり、1888 年が唐船貿易のピークで年に 193 隻も来航した。形態は小型船から大型船へと変化し、唐船が壊れると長崎で修理することもあった。出島のオランダ貿易というのは東インド会社と契約した正式な国家間貿易であったが、中国貿易の唐船は民間の商船を使った貿易であった。

江戸の初期、中国貿易ではベンガル、トンキン産の生糸を輸入していた。その後、18 世紀初めには生糸の国内生産が増大したため、輸入額は減少した。その代わりに主力となったのはバタビア産の砂糖だ。この時期、バタビアでの砂糖の生産が増大したため、唐船もこれを買って日本へ運んだ。多くの砂糖を積むことは利益を増大させるほか、安全な航海のための重石という役割もあった。他にも、薬種や香木、ガラス製品などを輸入した。

そして、日本が輸出したものは江戸初期では主に銀であった。16 世紀から 17 世紀の初め、日本は世界有数の銀産出国であった。金も小判を輸出していたが、元禄小判は品質が悪かったため喜んで迎え入れられなかった。その代わりに、銅や俵物を輸出した。銅は中国では不足していたため、魅力的な商品だった。また、行きは砂糖を重石にしていたが、帰りは銅を重石にしていた。俵物というのはいりこや干鮑、フカヒレなどを俵に詰めたものだ。他にも昆布やするめ、かつお節、シイタケなどを輸出した。

2）唐人屋敷

唐人屋敷は 1688 年に江戸幕府が急増した唐船との中国貿易を管轄するために設置を命じ、翌年の 1689 年に完成した。多い時には屋敷内に 3000 人ほど住んでいた。それまでは貿易で長崎に来航していた中国人は市中の馴染みの家に宿泊していた。屋敷は約 9400 坪で、これは出島の約 2 倍の広さである。

唐人屋敷はまず大門という門があって、そこでは中国人の出入りをチェックする。次にニノ門があって、その奥は中国人たちの居住地区となっていた。大門とニノ門の間には広場があり、ここで商人たちは店を出して、魚や野菜、日用品などを売っていた。

日本人の唐人屋敷の出入りのためには通行許可書である門鑑が必要で、広場での商売が許可された商人、遊女などに与えられた。ニノ門より奥は役人であっても遊女以外の日本人は入ることができなかった。

中国人たちは二階建ての長屋で暮らしており、屋敷内には 4 つのお堂もあった。このお堂は唐人屋敷内に暮らしていた人の心のよりどころであった。私たちは現存している 4 つのお堂を実際に見学しに行った。

新地中華街を抜けて、唐人屋敷跡とかかれた大門をくぐり、南の方に坂を上っていくと、土神堂がある。ここは市指定史跡で、唐人屋敷に滞在する船主たちの願いにより建設された。唐人屋敷内のお堂の中で一番初めである 1691 年に建設されたものである。1784 年の大火で焼失したが、1977 年に復元され、今も残っている。入口の赤い門をくぐると、すぐに小さな石橋があった。下は池になっていた。ここに祀られているのは土神様で、土神堂の前の広場では土神様の誕生日の 2 月 2 日にお祭りが開かれる。この神様は土地や家を守り、豊作、金運、治病などのご利益があるとされている。福徳正神とも呼ばれる。中国では古くから広く民間信仰されていた。長崎のお墓には、墓石の横に土神と書かれた小さな石碑が見られることが多い。これは中国の土神信仰が長崎に根付いたためだ。

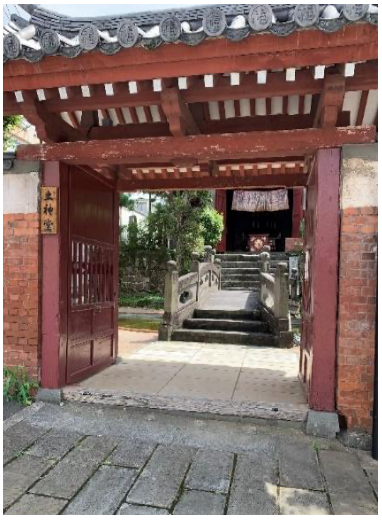
少し進むと十善地区まちづくり情報センターと蔵の資料館がある。そこでは唐人屋敷の概要や出土した磁器を見学することができる。

さらに南に進むと天后堂がある。ここも市指定史跡であり、1736 年に、唐人屋敷にいた南京地方の唐船主によって建設された。周りはレンガの塀で囲まれており、入口に 2 本の柱が立っていた。お堂は開けているのではなく、くりぬかれているようだった。ここでは航海安全を祈り、海の神の媽祖を祀っている。この神は天后聖母とも呼ばれる。唐人たちは季節風に乗って来航するため、その安全を願い媽祖像を船内に祀った。長崎に到着すると、この像は天后堂に運ばれた。これは「媽祖行列」として現在のランタンフェスティバルで再現されている。中央に媽祖様、右には関帝、左には観世音菩薩が祀られている。媽祖様は千里離れたところのものでも見える千里眼と、どんな小さな音も聞き取れる順風耳を従えている。

そして東に進むと観音堂がある。観音堂の市指定史跡であり、1737 年に福建省出身の唐船主によって建立された。現在の建物は 1917 年に改築されたものである。このお堂は、住宅街を奥に入り突きあたりにあった。入口にアーチ形の石門があり、これは唐人屋敷時代から残っているものだ。右側には慈悲深い仏として慕われ、苦難除去、厄除け、健康などのご利益がある仏教の代表的な神様が祀られている。左側には三国志の武将である、関羽雲長が神格化し、商売繁盛などのご利益がある関帝などが祀られている。

北の方に坂を下りると、福建会館天后堂がある。ここは唯一の市指定有形文化財だ。唐人屋敷の解体後、1868 年に福建省南部出身の貿易商たちの会所として建設。唐人屋敷があった時代、「この場所には聖人堂というお堂がたっており、その基盤の上に福建会館を改築したという記録が残っている。」本館の建物は原子爆弾により壊したため、正門と天后堂が現存している。2 体の媽祖像が祀られており、ランタンフェスティバルの媽祖行列では小さい媽祖像を興福寺まで運ぶ。

土神堂（8 月 22 日）筆者撮影




観音堂（8 月 22 日）筆者撮影

旧唐人屋敷内　天后堂
（8 月 22 日）筆者撮影

福建会館　（8 月 22 日）筆者撮影

3）唐寺

また長崎に暮らす中国人は出身地ごとに寺を開山した。1620 年ごろに中国人が小庵を、航海安全を願ってつくったことから始まった。また、この時代はキリスト教を厳しく禁じていたためキリスト教徒でないことの証明のために唐寺が次々と建ており、貴重な文化財が残されている。興福寺内には唐人屋敷の門が移築されている。また崇福寺内にある「第一峰門」と「大雄宝殿」は国宝になっている。

4）唐人屋敷の結末

1859 年の日本が開国した後、唐人屋敷を出ていく人が多くなった。彼らは大浦の外国人居留地や新地に進出した結果、唐人屋敷は荒れ果てた。その後 1868 年に唐人屋敷は解体された。その歴史は 179 年にも及んだ。

5）中国文化

江戸時代にも多くの中国人が出入りしていた長崎では、中国文化が持ち込まれ、長崎の文化に大きな影響を与えた。まず龍踊だ。これは江戸時代、1 月 15 日の上元節にあたる日に唐人屋敷内で中国人が演武を行っていた。そこから、長崎の町人がくんちの奉納踊にしたといわれている。また、ペーロンも江戸時代に福建省から伝えられたものだといわれている。これは端午の節句である 5 月 5 日とその翌日に行われていた。長崎奉行が禁令を出すほど盛り上がった。

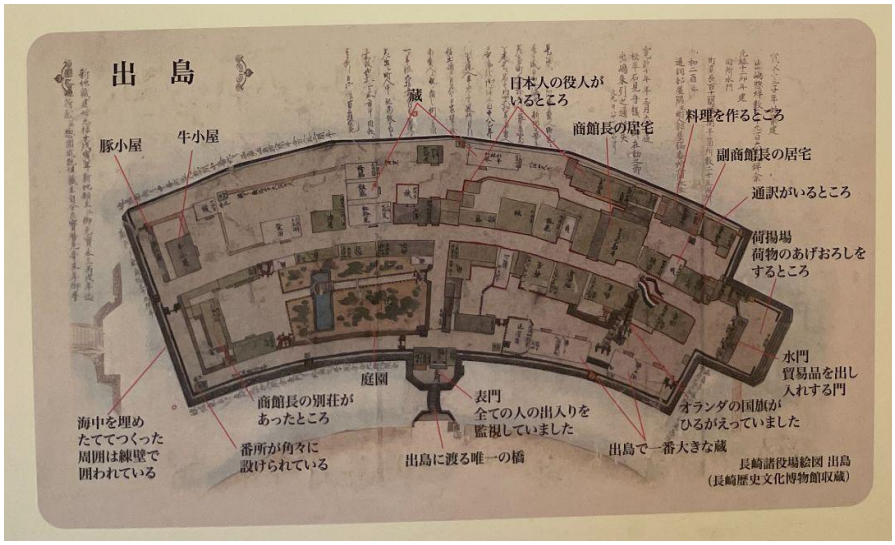
崇福寺（8 月 22 日）筆者撮影

興福寺（8 月 22 日）筆者撮影

崇福寺大雄宝殿（8 月 22 日）筆者撮影

6、オランダ（西洋）と長崎の交流

オランダ（西洋）関連で訪問したのは、長崎歴史文化博物館、出島だ。しかし中国関連で訪れた唐人屋敷跡にも出島に関する資料があった。



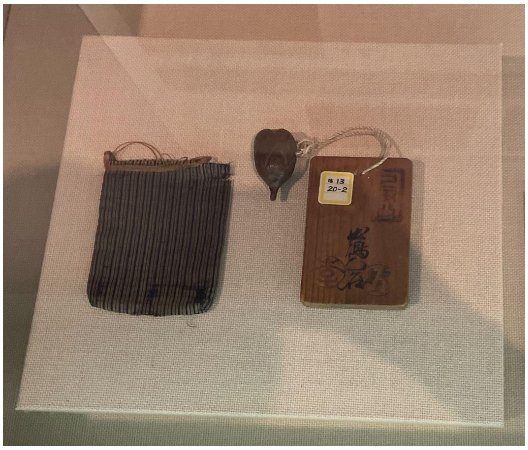
長崎歴史文化博物館

常設展示には貿易都市である長崎がポルトガルやオランダをはじめとする西洋の国々との交流がどのように行われていたのかを解説と共に貿易の中で実際に取引された輸出入品や書物が展示されていた。

（右図　8 月 23 日筆者撮影）

出島へのパスポート

出島の入館許可証。木札の表に「出島乙名」と墨書し、二人の乙名の焼印がある。裏には入館できる対象が記されている。



出島

ポルトガル人の収容、鎖国時代のオランダとの貿易が行われていた建物が忠実に復元されている。オランダ船の船長や商館員が利用していた部屋だけでなく、輸入品を収めていた蔵や出島の全体像がわかる 15 分の 1 の模型（下図　8 月 23 日筆者撮影）なども展示されている。時間の都合上、ガイドの説明を受けることができなかったが建物ごとに説明書きが詳しくあった。

1)　ヨーロッパとの歴史

1550 年に平戸にポルトガル船が入港し、1570 年長崎港が開港した一年後ポルトガル船が入港し貿易港長崎が誕生した。1636 年には長崎市に出島が完成しポルトガル人が収容された。その後幕府の意向や出島町人たちの要望などによってポルトガル人が追放され空地になったため、長崎の平戸にあったオランダ商館を出島に移転した。この後 218 年もの間、

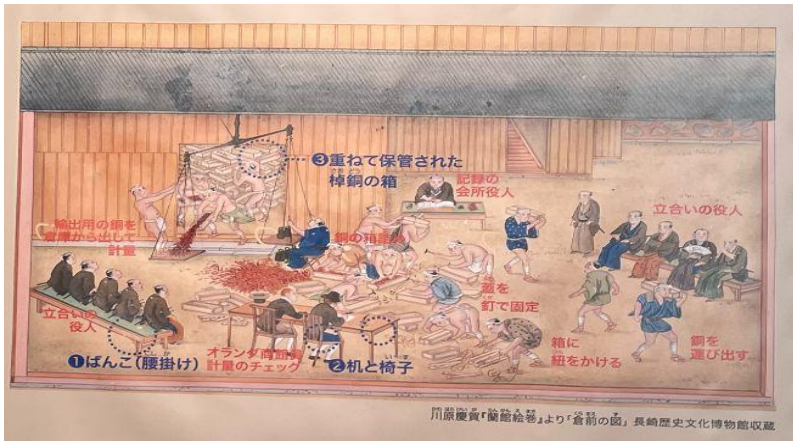
出島にはオランダ商館がおかれヨーロッパに向かって開かれた唯一の窓口となる。

２）オランダ貿易

初期の主要な輸入品は生糸や絹織物、輸出品は銀であった。そしてその後輸入品は砂糖、輸出品は銅へと移行していった。銅は寛永通宝などの和銭や棹銅に成形され輸出された。これらの日本の銅は貨幣をはじめ、船舶や建築、武器、調理器具等、様々な製品の材料になった。

17 世紀の後半以降、バタビア産の砂糖が大量に輸入された。元禄期（1688～1704）には一時ピークを迎えたが正徳新例（江戸時代、幕府による長崎貿易制限のための諸規　定の総称）以降、その量はバラスト（船舶の底荷）程度に迎えられた。しかしその後再び輸入の主力品となった。こうして甘い食品が庶民階層にまで普及するなど日本の食文化に大きな影響を与えた。

右図　8 月 23 日
出島（資料）
筆者撮影



右図　8 月 23 日
出島
筆者撮影

天秤量り

オランダ船が運んできた輸入品の砂糖等を計量するもの。天秤の一端に籠や袋に詰められた砂糖を置き、もう一端に分銅を置いて、棹が水平になった時の分銅の総重量で砂糖等の重さを測る。

３）出島

出島は日本人にとってヨーロッパを知る窓口であった。ヨーロッパの科学技術や文化・芸術、また世界の情報は出島を通じて日本に伝えられた。一方で世界の人々にとっても日本を知る重要な窓口であった。オランダ船入港の期間を除くと出島の商館員は十数人にすぎなかった。しかし出島の商館長や商館医は、幕府の役人や蘭学者、阿蘭陀通詞の求めにより、ヨーロッパの科学技術などの知識を伝えた。フィリップ・フランツ・フォン＝シーボルトは有名な商館医の一人である。彼はドイツのヴュルツブルグ大学で医学を学んだ後、オランダ政府から日本研究の特命を受け、27 歳で出島に赴任した。以後 5 年間鳴滝塾などで治療や弟子の教育にあたりながら、様々な日本の文物を収集し、帰国後に『日本』・『日本植物誌』・『日本動物誌』を出版した。また、人間だけでなく輸出入品を保管する場所としても使われた。出島内の建物多くは一階が倉庫になっていた。

出島の建物は、基本は和風の建物であるがオランダ人が好みで手を加えて住んでいたため、一部に洋風建築の雰囲気もある。当時の日本では唐紙を壁や天井に貼るのは最高級の数寄屋に限られ、通常は襖にだけ用いられていたが、出島では壁紙の感覚で唐紙が貼られた。また、建具にペンキを塗ったり、窓の障子にビードロという板ガラスを入れたりすることは当時の日本建築ではほとんど例がなかった。

海外の文物や情報が行きかう窓口は、当時他にも対馬、薩摩（現鹿児島）、松前（現北海道）などがあったが、オランダ人が常駐し暮らしていた出島は、「日本にあったヨーロッパ」、「ヨーロッパに最も近かった日本」といい特別な場所であった。出島を行き交うヒト、モノ、コトは単なる物流の枠を超えて、江戸時代の文明、文化を語る上で非常に大きな意味を持っている。

右図　8 月 23 日
出島
筆者撮影

カピタン部屋の大広間
（商館員の部屋）

この部屋はカピタン部屋の中で 35 畳と最も広く、日本側の役人との応接や饗応の場として特に重要な役割を担っていた。

7. まとめ

まず中国との交流に関して、唐人が暮らしていた時代の跡地や寺などは残っているものの現在では反映していなかった。それよりも、その時代に伝えられた文化や、新地に形成された街の方が現在でも反映し、長崎県民に親しまれていた。食べ物や行事など、中国からもたらされた文化は長崎においてなくてはならないものだ。事前学習においてはあまり文献がなく、下調べが不十分だった。

そして、オランダとの交流に関して、長崎と貿易をしていたのはオランダのみだが、文化の要素として残っているものの中にはポルトガルやスペインなども含まれる。文化に関してはオランダの要素だけではないのだ。これは南蛮貿易の時代から形成されているためだ。そのため、和華蘭文化の蘭は一概にオランダ文化だけとはいい難い。

和華蘭文化そのものに関してはあまり情報がなく調べることができなかった。しかし、卓袱料理は資料だけではわからない雰囲気や味を体験することができた。また、現地の図書館で再度調べると様々な文献があり、より詳しいことを知ることができた。

長崎に残っている文化は多くの国の影響を受けていることに加え、長崎で独自で発展しているものが多く見られた。長崎の室町時代にポルトガル人が伝えたカステラや、明治時代に中国人の店で中国留学生にふるまった料理が起源とされるちゃんぽん。これら今では長崎の名産であるが、これらも海外から持ち込まれたものなのだ。

まず今回の研究旅行の目的としていた和華蘭文化の実態を知るという点に関して私たちは長崎で独自で発達した文化すべてを「和華蘭文化」と呼ぶと結論付けた。調べ学習の段階では卓袱料理のほかに和華蘭文化があるのかを調べることに苦戦していた。インターネットでも文献でも見つけることができなかったからだ。しかし、現地に訪れて、いろんな文化を知ることによって気づいたことがある。どの文化も中国だけ、オランダだけの影響を受けているのではなく、卓袱料理の中に南蛮料理である「パスティ」、中華料理である「角煮」、長崎の名産である「新鮮な魚」がそれぞれ入っているように、何かしら相互に影響を与え合っているのだ。今回は中国、オランダから来たそれぞれの文化を歴史とともに調べた。しかし、長崎の文化、例えばおくんちなど、ピックアップしてみると、その発達過程の中に様々な国の影響を受けたものを知ることができ、視野が広がるのではないかと考えた。

中国に関しては、唐人屋敷についての情報が少なかったが、実際に訪れてみると、地域の資料センターがあったり、多くのパンフレットが設置されていたりしたため多くの情報を手に入れることができた。唐人屋敷は住宅街の中に唐寺が残っているだけであったが、新地の中華街は活気があり発達していた。しかし、残っていた唐寺は旧正月に向けての準備を行っているところもあり多くの人がいた。まだまだ中国の文化は長崎に残っていると実感した。

また良かった点として長崎市立図書館には、長崎の郷土についての本がたくさんあった。特に卓袱料理についての本が豊富であった。そのため、事前学習よりも多くの情報が集まった。また、唐人屋敷はインターネット上には情報が少なかったが、実際に訪問するとパンフレットや資料館などがあり、そこでは管理をしている方に展示されている資料を基に説明をしていただくことができた。そして、実際に調べるだけではなく店に訪れ、卓袱料理を食べることによってマナーや雰囲気、味に関して新しい発見があった。研修旅行を進めていく中で、使用する交通機関や経路など下調べをしっかり行っていたため予定よりもスムーズにまわることができた。

反対に反省点としては、長崎歴史文化博物館に対して館内プログラム野調べ学習への協

力を利用して質問状を作成し送信したが、対象が高校生までであったため利用することができなかったことだ。また、まだまだ夏で暑かったため外をまわるスケジュールの中で熱中症気味になってしまうこともあった。スケジュールは効率だけでなくしっかり休息を取る時間もつくるべきだった。

〈参考文献〉

・麻生千鶴子他『長崎の卓袱料理と南蛮料理』川脇会、1982 年
・脇山順子『長崎料理―百花繚乱ふるさとの味』長崎新聞社、2005 年
・古場久代『長崎食文化の奥義―卓袱料理のすすめ』長崎文献社、2007 年
・山口美由紀『旅する出島―Nagasaki Dejima 1634-2016』長崎文献社、2016 年
・長崎市編さん委員会『わかる！和華蘭』株式会社長崎新聞社、2016 年
・迫田ひなの・早田萌『長崎口と和華蘭文化―異文化のさざ波』花乱社、2021 年

・長崎市公式サイト city.nagasaki.lg.jp（2022 年 8 月 26 日閲覧）
・長崎市公式刊行サイト「travel Nagasaki」https://www.at-nagasaki.jp（2022 年 8 月 26 日閲覧）
・長崎新地中華街公式サイト www.nagasaki-chinatown.com（2022 年 10 月 19 日閲覧）
・（株）フマキラー製品情報サイト fumakilla.jp （2022 年 10 月 19 日閲覧）